



4月から本格運用開始！ WEB アプリ「湖（うみ）レコ」で 漁獲情報の迅速収集とデジタルデータ化へ

琵琶湖の水産資源を未来にわたって持続的に利用するためには、『どの種類の魚が、どこで、どんな方法で、どれだけ獲れているか』といった漁獲情報の把握が欠かせません。

そこで、滋賀県では全国に先駆け、漁業許可等を所有する全ての漁業者がスマホ等で漁獲情報を報告できるシステム「湖（うみ）レコ」を開発しました。琵琶湖からスマート水産業を推進します。

システム開発の背景

漁獲情報の報告について、現在、本県では紙媒体で行われていますが、漁業者にとって大きな負担となっているだけでなく、集計や報告内容のデータ化にも時間を要しています。漁業者の負担の軽減を図りつつ、漁獲報告の履行と資源評価に必要なデータ収集を一元的に可能とするシステムが必要とされてきました。

システムの概要

- 名 称：滋賀県漁獲報告システム 「湖（うみ）レコ」
- 形 態：WEB アプリケーション (<https://umirec.com>)
- 事業主体：滋賀県
- 利用対象：漁業許可数 約 1,500
- 対象漁業者数：約 520 名
- 報告可能事項
 - ① 操業日
 - ② 漁法とその規模（網の数や操業時間等）
 - ③ 魚種毎の漁獲量
 - ④ 操業場所（マップ上で指定）
- 漁業者が出来る主な機能
 - ① 漁獲情報をスマホ等に入力することで、県に迅速な報告ができる。
 - ② 自身が報告した漁獲情報を集計、分析、可視化できる。
 - ③ 県からのお知らせや所有する漁業許可を確認できる。



なぜ漁獲情報の把握と資源管理が必要か

全国的にみても水産資源が長期的な減少傾向にある中、適切な水産資源の管理を行い、資源水準を維持、回復させていくことが重要です。そのため、資源管理は、中長期的に漁獲できる量を増やし、漁業者の所得を向上させるために実施するものであり、漁獲情報の報告の義務は漁業者の責務として令和2年の改正漁業法により義務化されました。

漁獲できる量が増大すれば、生鮮、加工など需要に応じた生産を行うことが可能となり、その結果、長期的な価格の安定、水産業の成長化に寄与するとされています。

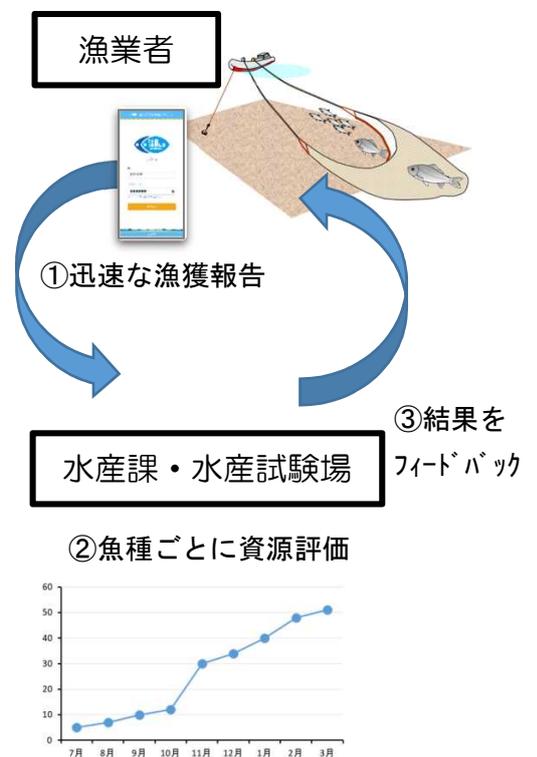
今後のシステムの活用

今後、水産試験場などの研究機関による資源調査と合わせて、漁獲情報を迅速に収集することにより、資源水準（資源が多いか少ないか）と漁獲の強さ（獲りすぎか否か）を評価し、目標とする資源水準に向けて資源管理型漁業を実践します。

これからの資源管理は漁獲を抑える、我慢するだけではなく、資源に余裕のある魚種は、積極的に漁獲し、漁家所得に変えていくことにも重点を置きます。

今回のシステム開発は、漁獲量だけではなく、操業場所や操業の規模も同時に収集できることから、精度の高い資源評価が迅速に可能となるものとして期待できます。

漁業者が減少するなか、これまで取り組んできた環境保全や稚魚の放流などに加え、資源管理の強化を図り、少数でも精鋭な儲かる水産業の実現を目指します。



参考

◆愛称「湖（うみ）レコ」の由来

漁業者は、琵琶湖のことを「うみ」と言います。漁業者が操業を通じて、水産業から見た今の琵琶湖を記録（record）し、未来につなげたいと思いを込めました。

◆その他

本システムは、水産庁「漁獲情報デジタル化推進事業」の支援を受け開発しました。